Ritsumeikan University College of Economics Alumni Association

RITSUMEIKAN E-NEWS

立命館大学経済学部同窓会会報　第24号

新会員になられた皆様へ

経済学部同窓会会長　**住野　公一**

３月で卒業された皆様。改めましてご卒業おめでとうございます。
４年間大学で研鑽を積まれた成果をいよいよ世に問う時が来ましたね。こうしたい、ああしたいと言うお気持ちで一杯では無いでしょうか？皆様が学んで来られたのは原理原則だと思うんですね。原理原則の無い行動はその場当たりで無駄が多いと思われます。自分の行動に一貫性を持たせる為にも原理原則は非常に重要だと思います。

しかし、商売の現場は必ずしもモデル通りでは有りません。人間十人十色と言いますが色んな様々な条件下で意思決定しなければならない場面がきっと現れると思います。その時には知恵が必要です。勉強の中で自分の知恵を出すことも学ばれたと思います。しかし、じぶんの力で考え出す知恵は貴重で重要では有りますが そんなに沢山出て来る訳では有りません。そこで人様の知恵、経験が重要になって来てるんでは無いかと思います。

我が立命館大学には全国都道府県に卒業生の集まりで有る「校友会」と言う組織が有ります。毎年各地で皆様を歓迎するイベントである「新卒業生歓迎会」を行っています。ぜひこれに顔を出して下さい。知らない人ばかりで気後れする、と尻込みされる方もお有りかと思います。心配要りません。10 分過ぎればもう打ち解け合います。同じゼミ、同じサークル等の人が居るものです。皆様の人生を太く豊かにする為にも是非活用下さい。

経済学部同窓会も毎年イベントをやってます。多くの先生方も参加下さいますし、時の人の講演も毎年やってます。こちらにも来て下さい。

でも、やはり健康が大事ですね。先は長いです。健康に留意され張り切って活躍されることを祈願して筆を置きたいと思います。

学部長退任のご挨拶

経済学部長　**松原　豊彦**

１月２３日の理事会において副総長に選任されたことにともない、経済学部長の職を退任することになりました。４年１０ヶ月の学部長在任期間中におきましては、学部同窓会より経済学部教学の発展ならびに現役学部生の成長に対して一方ならぬご支援ご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。この間、学部同窓会の役員に中堅・若手世代の参加が進み、学部同窓会活動は新たなステージに入ったように思われます。就職支援企画メントレに多数の卒業生が参加して、現役学部生を励ましていただいたように、卒業生の皆様と現役学生との交流が一段と発展しました。今後は新学部長のもとで学部改革の具体化が進められることと思います。卒業生の皆様との絆をいっそう強くするとともに、経済学部の教育・研究成果を国内外で発信し、大学の社会的役割を発揮していく所存です。引き続き、経済学部および現役学部生へのご支援をいただきますようお願い申し上げます。

新学部長の挨拶

新経済学部長　**松本　　朗**

経済学部同窓会の皆様。この度、学部長を拝命いたしました松本朗でございます。謹んで就任のご挨拶を申し上げます。有数の私学として発展してきた立命館大学において経済学部は最も古い歴史を持つ学部の一つです。その長い歴史の中で、多くの OB・OG を排出し、日本社会の発展に貢献してきました。それはまた立命館大学の発展の礎でもあったと言えます。OB・OG の皆様が社会的貢献を通して、また直接に経済学部の発展と立命館大学の発展に寄与されてきたことは、立命館大学の教学を担う教員にとって大きな財産であり、誇りでもあります。今後、経済学部長として学部の運営の舵取りを担うことになりましたが、OB・OG の皆様が築き上げた経済学部の伝統と財産を守り、育てていくことが使命を考えております。言うまでもなく、経済学部の発展にとっては OB・OG 皆様のご支援、ご協力が欠かせません。今後のご援助をお願いし、就任のご挨拶とさせていただきます。

第 10 回経済学部同窓会総会を開催！

2014 年 12 月 6 日（土）、朱雀キャンパスにて 100 名を超える参加者が集い、経済学部同窓会の講演会、第 10 回総会が開催されました。

講演会では、地方創生で大きな注目を集めている徳島県神山町の NPO 法人グリーンバレー理事長の大南信也氏を講師に招き、「創造的過疎への挑戦 - カミヤマ・モデルが世界を変える - 」をテーマに講演をいただきました。

講演会に続き、第 10 回総会が開催され、活動報告と今後の計画、収支決算と予算、役員体制について提案され、満場一致で承認されました。（役員体制は下記のとおり）

総会の後は参加者の懇親会が開催され、当日は、経済学部名誉教授と退職された先生から、濱崎正規先生、杉野圀明先生、芦田文夫先生、坂本和一先生、甲賀光秀先生、藤岡惇先生にお越しいただくとともに、経済学部からは松原豊彦学部長、稲葉和夫教授に参加いただき、参加者は旧交を温め、近況報告に花を咲かせました。経済学研究会と稲葉ゼミからは現役の学生が参加し、親子ほどの先輩と貴重な交流を深め、学生からは先輩がつくり上げてきた伝統を引き継ぎ、立命館大学経済学部生として力を発揮していきたい旨のスピーチがあり、参加者から温かい拍手と声援が送られました。

役職名	氏名	勤務先	卒業年
会　　長	住野 公一（再）	㈱オートバックスセブン相談役	1970
副 会 長	菅下 清廣（再）	スガシタパートナーズ㈱代表取締役社長	1969
	吉田 郁雄（再）	㈱滋賀銀行　専務取締役	1977
監　　事	橋本 弘之（再）	立命館百年史編纂室　元参与	1966
	橋本 貴彦（新）	立命館経済学部准教授	2008（院）
顧　　問	松原 豊彦（再）	立命館大学経済学部長	
	横山 政敏（再）	立命館大学経済学部教授	1971
事務局長	山岡 祐子（再）	㈱白川書院　代表取締役　編集長	1983
会　　計	澤田 博昭（再）	立命館大学国際部　留学生課課長	1997

大南信也氏　略歴

【講師プロフィール】

1953 年徳島県神山町生まれ。米国スタンフォード大学院修了。過疎地域が生き残るための解決策を見いだそうと、90 年代初頭よりアートや環境を柱に地域と世界をつなぎ、グローバルな視点での地域活性化を図る。ワークインレジデンスによる若者や起業者の移住、IT ベンチャー企業のサテライトオフィス誘致による雇用の創出などに取り組んでいる。「創造的過疎（数の過疎から質の過疎）」を標榜し、クリエイティブ人材のアイデアやスキルを集めることによって地域課題の解決を進めている。ふるさとづくり有識者会議委員（内閣官房）、地方公共団体情報システム機構経営審議委員、徳島大学客員教授、四国大学特任教授。

【受賞歴】

2000 年 世界に開かれたまち自治大臣表彰
2000 年 ふるさとづくりコンクール内閣総理大臣賞
2009 年 地域環境美化功労者環境大臣表彰（個人）
2009 年 国際交流基金地球市民賞
2013 年 文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門･神山町）
2013 年 過疎地域自立活性化優良事例表彰 総務大臣表彰
2014 年 徳島新聞賞大賞

創造的過疎への挑戦
- カミヤマ・モデルが世界を変える

NPO 法人グリーンバレー理事長　大南　信也

皆さん、こんにちは。グリーンバレーの理事長をやっております、大南信也と言います。多分 4 ～ 5 年前だと、自己紹介をする時に、徳島県の「神」というところまで話をしたら、ほとんどの方が勘違いされて、「ああ、おばあちゃんが葉っぱを売る町だ」と、上勝町とよく間違われていたんですが、最近になると「ああ、IT ベンチャーの人たちが河原でパソコンを開いて、東京の本社とテレビ会議をしている町だ」と、少し名前が知られてきたのかなと思います。

私自身は 1953 年生まれで、1964 年の東京オリンピックの時は小学校 5 年生でした。村の所有林がたくさんあったので、それが飛ぶように売れ、非常に豊かな町に。ところがそれ以後、本当に坂を転げ落ちるように過疎化が進んでいきます。

そのような状況を見ながら、人間って、60 年、70 年、80 年の「生」を頂いている中で、自分たちの町が何もできずに、過疎が進んだり、町が持続できなくなっていく状態をそのまま傍観するというのはしんどいなと。1990 年くらいから仲間と一緒にもう少し抵抗してやろうと始めたのが、このグリーンバレーの活動になります。

アメリカの名コーチにアンソニー・ロビンズという人がいます。その人が「人というものは 10 年で起こったことを過小評価して、1 年で起こったことを過大評価する」という言葉を残されています。結局、今、神山というのはここ 2、3 年のことが注目されているわけですけれども、実はそれに隠された、20 年以上の、わりと地道な活動があって、今があるということになるのではないかなと思います。

今日はそのような、過小評価されがちな部分も含めて、今までグリーンバレーが何をやってきて、今現在、何をやっていて、そして将来何を目指していくのか、というあたりをお話したいと思います。

＜創造的過疎について＞

「創造的過疎」という言葉を今から 7、8 年くらい前に作りました。日本全体が 2007 年くらいから人口減少の時代に入っています。今まで人口を失ってきたような地方とか過疎地で、これから劇的に人口を増やすというようなことはまず不可能だと思います。だから

まずはそういう、人口減少の現状を受け入れ、今までのように数だけにとらわれず、もう少し質的なものを追求する必要があるんではないかというのが、この「創造的過疎」の考え方です。

そこで、発想をガラリと変えて、多様な働き方が可能なビジネスの場としての価値を高め、農林業だけに頼らない、バランスのとれた町を目指せないか。というのが「創造的過疎」の考え方です。日本の過疎地、地方には大きな課題があります。一番大きい問題は仕事がないということです。その結果、過疎地で生まれ育った子たち、若者がふるさとに帰って来られない。当然仕事がないから移住者も呼び込めない。結果的に後継人材が育たないという問題が日本の地方都市に起こっているような気がします。

このあたりを解決するために神山ではこの「神山プロジェクト」というものをいくつか進めています。

まずはサテライト・オフィスという働き方です。場所を選ばない働き方が可能な企業を誘致することで、神山で生まれ育った子たちが、サテライト・オフィスで働くような職種に就けば、自分たちも帰って来られるんだ、というところを見せて、地域における世代循環を少しずつ取り戻していく必要があるのではないかなと思います。ところが、それだけに頼っていても地域は持続していかないと思います。当然、外部から移住者に入って来てもらう必要がある。ところが、仕事がないために移住者も迎え入れられない。その問題を神山ではワーキング・レジデンスというプログラムで解決しようとしています。地域に雇用がないのであれば、仕事を持った移住者、企業者を誘致すれば問題に解決がつくのではないかという考え方です。それとともに神山塾という職業訓練、企業支援等によって積極的な人材育成を図っているというところです。徳島県神山町は現在、人口約 6,000 人、1955 年には当時 21,000 人の人口です。もう 3 割が激減していて、どこよりも過疎化が進んだ町だと思います。この町が最近、「過疎の町で起こった 2 つの異変」ということで全国的に名が知られてきたのかなあと思いますが、これが 1 つ目の異変です。

2011 年度の社会動態人口です。当然過疎の町なので、ずうっと転出する人が転入する人を上回ってきたわけです。2007 年に神山町移住交流支援センターというのが置かれました。この運営を、神山の場合は町役場自身がやるのではなくて、民間住民の団体であるグリーンバレーが任されるわけです。そのあたりが効果を発揮したのかどうか、数値が改善していきます。そして、2011 年度に初めて転入者が転出者を僅か 12 名ですが上回ったわけです。人口 5,000 人を超えるような町で、例えば工場が立地するとか、宅地造成が行われて移住者が入ってくるというような特殊な要因以外でこういうことが起こることは珍しいと言われています。

ところが、その後また社会減になっていきます。でもこの数ですよね、マイナス 28、マイナス 23、何もやらなかった時は 100 人以上のマイナスが出ていたわけだから、大分改善されてきていると思います。それとともに、創造的過疎の一番重要な考え方は内容的なものを見ていくことです。2010 ～ 2012 年度までの過去 4 年間に神山に移住交流支援センター経由で入ってきた人たちの内容を分析していきます。

この期間に 58 世帯、105 名、子ども 27 名という人たちが神山に移住してきており、平均年齢が 30 歳前後です。だから多少の社会減を起こしていても、若い世代の人たちが入ってきているので、町の活力は失われていないのではないというのが考え方です。それとともに、2010 年 10 月以降、IT ベンチャー企業 11 社がサテライト・オフィスを設置しています。地理的な条件を見てみれば、羽田から飛行機で徳島空港まで 60 分、そこから車で 60 分の場所になります。

＜グリーンバレー設立＞

では、そもそもグリーンバレーは何から始まったのかという話からしたいと思います。スタートは 1 体の人形です。1927 年にアメリカから日本に送られてきた友好親善の人形。当時、日米関係は非常に険悪でした。そのあたりの関係を少しでも子供の世代から変えていこうと。だからアメリカで「1 セント募金」というのが行われ、日本の子供達に人形を送ろうという運動が起こりました。そのうちの 1 体が私の母校である神山町の神領小学校。アリス・ジョンソンという人形が残っていました。なぜこの人形が残ったのかというと、当時この神領小学校の女性教師だった先生が「人形に罪はないから」ということで木箱に入れ、用務員室の戸棚の奥深くにしまっていたわけです。結果的にこれが残りました。

1990 年度になると私の長男が幼稚園に行き始めます。久しぶりに PTA の会合で小学校を訪れるわけですが、そうするとこの人形が廊下に飾られていました。校長先生にいろいろ見せてもらっていたら、人形がパスポートを持っていたわけです。パスポートに出身地が書かれていました。アメリカ、ペンシルバニア州、ウィルキンスバーグという町です。当時、63 年前に送られてきた人形です。もし 10 歳の女の子が送ってくれたとすればその人は 73 歳、まだ生きておられるかもしれないという思いから、今度はウィルキンスバーグの市長さん宛てに手紙を書きます。「お宅の町から 1927 年に送られてきた人形がこの神山という場所に残っている」と。誰が送ってくれたのか、探し出してほしいという依頼をします。

向こうで半年くらい探してくれた結果、「見つかりました」という連絡が入ります。そこで、人形を里帰りさせようよという運動を起こします。それで 1991 年の 3 月 3 日、ひな祭りの日にこの会を作り、5 ヶ月後、町民 30 名の訪問団を結成してこの人形を連れ帰ったというのがそもそもの活動のスタートになります。その時の 5 名くらいの、のちにグリーンバレーの中心になるような人間が、同じこの体験をしていたというのが非常に大きかったと思います。これはどういうことかというと、同じ経験を積んだ人間が多いとこれからいろんなことを始める時に非常にハードルが低くなるわけですよね。あの時みたいな感じでやればできるよな、というような共通の認識が共有できたというところです。

翌年になるとアリスの会はミッションを得たので発展解消し、そして神山町国際交流協会を設立します。ところが、2 年たっても、3 年たってもあまり変わらないわけです。うちの町はやっぱり地域づくりとか、町起こしはうまく動かないのかなあと、あきらめ始めていた時に転機が訪れます。

徳島県が新地方計画という 10 年間の計画を発表します。その中で神山を中心とした場所で、徳島国際文化村を作ります。という僅か 3 行の新聞記事が徳島新聞に載りました。この記事を見た時に国際交流協会のメンバーで話し合ったことは、これから 10 年後、20 年後を考えた時に、国とか県とか市町村が作ったような施設であっても必ず自分自身が管理運営するような時代が来るだろうと。与えられたものだったらうまく運営できるはずがない。では、自分たちはこういうような国際文化村がほしいということを逆に徳島県のほうに提案しようという動きを始めたわけです。このあたりから少しいろんなことが変わっていきます。

何が変わったかというと、町を見る時の見方がこの時点でガラリと変わったんだと思います。では、ここで何をやり始めたのかというと、まず 10 年後、20 年後の町の姿を思い浮かべたということです。そこから逆算して、今何をやっておかなければいけないかということを考え始めたわけです。

そこで、国際文化村委員会というのを民間で作りました。この中で議論を進め、結果的にいろんなプロジェクトが巣立っていって、それらを統括、運営するためにグリーンバレーが 2004 年に出来上がります。

＜アイデアキラーの存在＞

ところが、この国際文化村委員会を開いた時に困ったことが起きます。というよりは、困った人がこの会合に現れたわけです。だれが現れたのか。アイデアキラーと呼ばれる人です。アイデアキラーってわかりますか？　アイデアを破壊する人です。例えばだれかが 1 つアイデアを出すと、あなたが言ったことは 5 年前に出てきて、あの時うまくいかなかった、理由は「いいな、いいな」と言ったけれども、だれも先頭に立たなかったと。とにかく出てくるアイデアを、

自分たちの過去の失敗の例に挙げて全部壊していく人。いるわけですよね。たぶん会合とか組織の中に 1、2 割位おります。結構説得力も持ちます。なぜかというと、自分たちがその失敗の経験というのを共有しているわけですよね。結果は出ているだろうと言われたら妙に納得してしまうということです。

アイデアキラーには、ある特徴があります。二言目に言う言葉です、「難しい」、「無理ができない」、これで新しいアイデアを潰していくということです。普通、人間が前例のないことに直面したら、「困ったな」と、なぜ困るのか、これに対処するようなマニュアルがないからですよね、こういう時はこうしなさいというのが示されていないから。

ところが、前例のないことというのは、「困ったなあ」ではなしに、チャンスと捉えるべきだと思います。時代の歯車を回す役が自分にめぐってきたというふうに考えるべきだと思います。もし前例のないことに前例ができたら、またアイデアキラーは言うわけです、「おれは最初からわかっていたんだ」と。わかっていたんだったら、なんでやらないんですかということだと思います。

アイデアキラーというのは組織とか、会社とか、行政だけに現れるのかというとそうでもないんです。私たちの心の中にもアイデアキラーというのはおります。例えば地域づくりを考える時に、いや、神山は特別なんだという話をする人がいます。自分たちの町は山奥だから、島だから、雪国だから、お宅の場所とは条件が全然違うんです。という話をする人がよくいます。この山奥で…、この言葉を吐いた時点で可能性はほぼ 0 です。なぜかというと、山奥であることを自分たちの力で変えられるかどうかの問題だと思います。絶対人間の力では変えられません。変えられないことは、もう受け入れるより仕方がないということです。受け入れた上で物事を考えていかなければ何も進んでいかないということになるのだと思います。

このアイデアキラー、現れたらやっぱりやっつける必要があると思います。グリーンバレーでやっつけた方法です。2 つの言葉を使います。1 個は「できない理由より、できる方法を考える。もしその方法が見つかったら、とにかくやってしまうということ」です。同じものを見た時に最初から決めつけて、できないと思うのか、できないと思っているけれども、何かいい方法があるはずやと。結果的に全く違ってきます。

やることによって、物事の展開を変えて、そこで浮き彫りになってきた問題とを 1 個 1 個つぶしていくほうが、よほど物事って効率的に進んでいくと思います。

この「とにかく始めろ」ということのもともとの英語の原語は「Just do it」です。この「Just do it」というのを阿波弁、徳島弁に翻訳したら「やったらええんちゃう」という言葉になります。これは結構、グリーンバレーの中で共有されている考え方です。

この国際文化村プロジェクトの目指したことは「神山町のイメージを変えてやろう」ということです。それまでの神山町のイメージ、例えば 70 年代、80 年代、徳島市内の人たちが「神山」という言葉を聞いた時に何を連想したか、案外単純です、2 文字です、「山やな」、もうこれ以外にないわけです、もう神山と聞いたら「山やな」と。この「山」としか呼ばれないような場所を、このプロジェクトを通じて先端的と呼ばれるような場所に作っていくこと。その結果、環境と芸術という 2 つの柱を立てます。

＜環境と芸術についての取り組み＞

環境については『アダプト・プログラム』これはアメリカ生まれの道路清掃のプログラムです。アメリカは非常に効果を発揮しているけれども、日本で初めて神山でやることにより、ごみのない道路を作ることによって 1 つの文化を表現しようと。それとともに芸術については『国際芸術家村』を作ろうという話になりました。

このアダプト・プログラムなんですけれども、1989 年アメリカ旅行中に 1 枚の道路標識を見つけました。前年には立っていなかった標識でした。

では何が始まったのかというと、ゴミの清掃の標識だったんです。これより 3.2 キロの区間、これをアダプトハイウェイと呼び企業が責任を持って清掃します。ということが書かれていました。日本であれば高速道路の清掃は国土交通省、あるいは行政がやるのが当たり前です。ところがアメリカではその高速道路を 3.2 キロの区間に区切って、区間ごとに企業なんかのスポンサーを当てて、その人たちが行政に代わって掃除をするような仕組みが始まっていました。そういう仕組みは必ず日本でも必要になると直感しました。そして、タイミングをずっと計っていたわけです。

その時期にちょうど国際文化村の話が出てきました。仲間の話の中で、文化の町ってどういう町だろうという議論をしました。その中で、来た人がまずこの町って何かきれいだよねとか、気持ちいいよねというのを感じて、その人自身がなんでこの町って気持ちいいんだろうと理由を探していたら、「道路にほとんどゴミが落ちてへんな。」というような、入ってきた人が五感で感じとるような町がたぶん文化の町だろうと。

そういうような町を作るためにアメリカに非常におもしろい方法があるけれども、日本のどこでもやられていない、これを神山で初めて導入することによって、このアダプト・プログラムの日本のモデルを作ろうと。そして、文化村の柱にしようということを提案したらみんなから賛同が得られた。賛同が得られたから、今度は徳島県に提案に行くわけです。行政も一緒になってやりませんかと。そうすると、すぐに答えが返ってきます。「だめです」。道路法の壁です。道路での商活動の利用は禁止されているから、企業名が入れば道路標識として認められない、日本の道路ではできませんという答えです。説明するんだけれども、担当者も興味がないわけです。とにかく法律ではだめだから、だめですよという一点張り。結局、実際のプログラムがどういうものだということがイメージできずに、前例がないから担当者は反対するんだなというふうに感じました。それだったら前例を作ってやろうと。そこで、1998 年 6 月に自主活動で始めることにしました。

自主活動というと言葉がきれいなんだけれども、要するに強行突破です。勝手に看板を作って道路に立てて掃除をし始めたんです。そうすると、1 年 4 ヶ月後にこういう仕組みは県としても必要だったと見解が変わってきた。結果的に『徳島県 OUR ロードアドプト事業』が生まれ、瞬く間に 47 都道府県にこれが広がっていったというのがこの道路清掃の仕組みなんです。

また、大きな変化を起こしていったのはアートのプログラムです。『神山アーティスト・イン・レジデンス』。1999 年に始め、今年で 16 回目を終えました。このプログラムでは、芸術家 3 名、日本人 1 名、外国人 2 名を神山に招待し、その人たちが作品を作っていくわけです。その製作支援を住民としてやっていこうというプログラムです。毎年、アーティストの作品を残していくので自然と、アートウォークみたいなものが形成されていっています。

一つだけ作品を解説します。『隠された図書館 -Hidden Library-』というのが去年の 12 月に出来上がりました。山の中で一番近い集落から 600m くらい、軽四トラックがようやく上がれるくらいの道を上がってきたらこの図書館に至ります。神山町には図書館がありませんでした。だから、アーティストが作品を作ったわけです。借りるのではなく預けるんです。神山町民であれば人生で影響を受けた本を 1 人 3 冊までこの図書館に納められる。寄付ができる。という図書館です。ある人が、卒業、結婚、退職した時なんかに読んでいた本、あるいは自分の人生に影響を与えた本を 1 人 3 冊まで、一生のうちでここに本を寄贈できます。本を寄付した人はこの図書館の鍵がもらえます。鍵を持った人だけが利用可能な図書館ということです。そうすれば、40 年後、50 年後はどのような空間になっているか。神山の人たちの思いのいっぱい詰まった図書館が完成するはずです。少しずつみんなが組み立てていって、もしかしたら 20 年後には完成しないかもしれない。もし自分が生きていなくても応援することによって結果的にこれが 50 年後、100 年後に完成するという、それの 1 つの駒になっていくということが非常に大切になるのではないかなと思います。地域づくりというのはそういうことだと思います。

この図書館を作った人が今度フランスのある村で同じコンセプトの図書館を作る計画があります。フランスの村に同じコンセプトの図書館ができたら、今度は神山とそのフランスの村が図書館で繋がっていくということです。そういうように、緩やかなネットワークを張り巡らすように少しずつ成長させるということが非常に重要になってくるのではないかと思います。

このアートによる町づくりというのは全国的に大流行しています。インフルエンザ並みの流行です。ほとんどの自治体は、見学に訪れる観光客を呼び込んで、その人たちが落していってくれるお金で地域を活性化させていく非常にわかりやすい方法です。当然、この観光客を呼び込もうと思えば有名なアーティストにやってきてもらって作品を残していく必要があります。ところが神山のプログラムは 2 つの大きな弱点を抱えています。一つ目は資金が潤沢でない。だから有名なアーティストには来てもらえない。二つ目に、地域の住民が始めたプログラムなので、アート教育をきちっと受けた専門家がいないということです。ということはアートを評価する仕組みを持たずして、無謀にもこんなプログラムを始めているということ

です。

言葉を言いかえれば、美術館がやるように自分たちの力でアート自身を高めようと思っても、知識がないから無理なわけですよね。そこで発想を転換します、アートは高められなくても、アーティストは人間だから高められるんではないかという方向に立つわけです。観光客をターゲットにするのではなしに、製作に訪れる芸術家自身をターゲットに置きます。欧米のアーティストたちが「日本で製作するんだったら神山だよね」というような場所を作ってしまおうということです。

＜「イン神山」ホームページからのつながり＞

このプログラムを７年、８年ぐらい続けてきた中で、そろそろ愛好会的なアートプログラムからビジネスが発生しないかなという方向を模索し始めます。ビジネス展開しようと思えば、当然情報発信が重要になってきます。それでウェブサイトを作ろうということになりました。2007 年から 2008 年にかけて総務省のモデル事業をもらって「イン神山」というサイトを作りました。作った時当然アート関連の事業を一生懸命作り込んでいくわけです。これらが一番よく読まれるだろうという想定のもとです。

ところがこのサイトが公開されたら意外なことが起こります。一番よく読まれるのがアートの記事ではなかったのです。では何が読まれたのか、それは「神山で暮らす」という神山の古民家情報です。それまで神山はほぼＩターン者がいなかった町です。ところが、インターネットに「神山で暮らす」という物件情報の小さな小窓が開いたことによって、結果的にここから神山に対する移住需要の連鎖が起こってきます。

このアートのプログラムを始める前の神山にはＩターン者はほぼいませんでした。ところが、このアートのプログラムをやったことによって招待されたアーティストたちが 2、3 年後から毎年ポツリ、ポツリと移住をし始めます。この人たちに対する空き家探しとか、大家さんとの交渉、さらには引越しのお手伝いなんかをグリーンバレーでやっているうちに、グリーンバレーに移住支援のノウハウが少しずつ蓄積されていきます。2005 年 12 月になると神山町全域に高速インターネット網が完成しました。だから今度はウェブサイトを作ろうという動きに入るんだけれど、2007 年になると団塊の世代の人たちが退職を迎える、そういう人たちを地域に迎え入れることによって地域を活性化させていこうという動きが全国の都道府県で起こります。徳島県も同様の動きの中で、移住のワンストップサービスを提供するために移住交流支援センターというのを全県の市町村に置いていこうという県の方針が示されます。8 つの市町村にこのセンターが置かれたわけですが、神山の場合だけ今までアーティストの移住のお世話をやってきているから、役場が運営するよりもうまくいくはず。委託するから運営してくださいということになります。

この時、グリーンバレーが得たものは何かというと、それは移住希望者の情報です。今どういう人たちが町に入ってきたいかという情報が常につかめるということです。情報を掴んだことによっていろんなことが展開していきます。

このセンターの運営にあたって全国の市町村がどういう情報を移住希望者から取っているのかというと、基本的に 2 つのことを聞いています。一つは家族構成、もう一つは物件の希望。ところが、グリーンバレーでは「あなたの夢は何ですか？志は？どのような能力を持っていますか？今までどのような仕事をされていて、10 年後、神山ではどういう職種から何割くらいの収入を得ていますか？」という、生活設計のビジョンを聞きます。ここで人間の情報を事前につかむことによって冒頭でお話をしたワーク・イン・レジデンスというのが機能してきます。

このワーク・イン・レジデンスというのは地域に仕事がないのであれば、仕事を持った人に移住してきてもらおうという考え方です。もともとこれは「イン神山」のサイトを作ってくれた方のアイデアです。町の将来に必要と考えられるような働き手とか企業家を、空き家を 1 つの武器にして逆指名しようという考え方です。

例えば、神山に石窯で焼くパン屋さんがないんです。パン屋さんができたら、毎朝おいしいパンが食べられるし、観光客の人もおみやげに買って帰れる。では、このお家はパン屋さんをオープンする人にだけに貸し出しますよ。と最初から入口を絞ってしまうということです。事前に職種を特定、限定できることによって、町をデザインできるということにつながっていきます。1955 年の神山温泉周辺の商店街には 38 のお店屋さんが店を開いていましたが、この 38 店だったお店が 2008 年のワーク・イン・レジデンスを始める

前にはわずか 6 店舗まで減っていました。では、ここにワーク・イン・レジデンスで呼び込んできた人たちを埋め始めます。そうすると、こういうような商店街を作りたいというものをほとんどコストもかけずに、入ってくる起業者と、空き家、空き店舗のマッチングだけで理想の商店街が出来上がるんではないかと考え始めます。

そこで、グリーンバレーが足を一歩踏み出して『オフィス・イン・神山』という事業を始めます。空き家改修の事業です。使っていない空き家を借りて、助成金をもらって、グリーンバレーでもお金を投資して内装や水回りなんかを改修していくわけです。

＜神山の変化＞

この事業で何が起こったのか。これがアベノミクスならぬ、ヒトノミクスです。一例ですが、2012 年の３月と６月に当時ニューヨークに在住していた 2 人の建築家が帰ってくることになりました。一方で、神山ではこの『オフィス･イン･神山』のプロジェクトがスタートし始めていました。ところが、これまで建築のプロジェクトをほとんどやったことがなかったので、建築家とのつながりがなかったわけです。この子たちが帰ってくるというので、では、一緒になってこのプロジェクトをやろうよという話になったわけです。そしてこの子たちが設計し、模型なんかも出来上がってきていました。そうした時に他のクリエーターから 1 通のメールが入ります。神山にオフィスを置きたいという話です。

そこで、以前改修した空家がそのクリエーターのオフィスになったわけです。このオフィスの完成間際にこの建築家の大学時代の同期で、「Sansan」という名刺管理の会社の社長である寺田さんがこの神山の話を聞くわけです。寺田さん自身は慶応を卒業後、三井物産に就職をしますが、いつかは起業してやろうと考えていたわけです。起業したあかつきには社員をシリコンバレーみたいな､自然いっぱいで、がっつりと、ある面ゆったりと仕事をさせようというふうに考えていました。そして 2007 年の５月で三井物産を退社して、６月に「Sansan」という名刺管理の会社を起業したわけです。起業した時の会社のミッションが「働き方を革新する」です。そこで、神山の話です。自然がいっぱいで、非常にオープンな住民が住んでいて、光ファイバー網が各戸に敷かれていて、ネットの速度がめちゃくちゃ早いという話に寺田さんが反応します。

2010 年９月、１泊２日で神山にやってきます。ほぼ即断即決です。20 日もたたないうちに「Sansan」の社員３名がここで働き始めていたというのが神山におけるサテライト・オフィスのスタートです。だから、サテライト・オフィスというアイデアを神山が実現したのではなしに、神山に入ってくる建築家、デザイナー、クリエーター、さらには IT ベンチャー企業の起業家なんかの思いやアイデアをグリーンバレーは一緒になって実現をしているから結果的にサテライト・オフィスが神山に生まれてきたということだと思います。

そういった中、1 枚の画像として NHK の番組内に流れます。この 1 枚の画像だけで神山の運命を変えてしまった、と言っても過言ではないです。その画像とは神山温泉の横の小川のせせらぎに足をつけた社員が本社との間でテレビ会議をやっている画像です、パソコンを広げながら。

現実のこういう姿が今度は六本木ヒルズとか、あるいはミッドタウンで働くような IT ベンチャー企業の人たちに衝撃を与えました。日本にもこういう場所があったんだと。それ以来、IT ベンチャーの動きというのは、いまだ途絶えることはなしに続いてきているというところです。

このサテライト・オフィスが始まった時は、本社の人間が 2 週間とかで回ってくるだけだから、移住者も生まないし、雇用も生まないと言われていました。ところがやってみるといろいろなことが起こります。すでに本社の人間は神山に移住してきて、常駐者としてここで働いていて、さらには開発拠点化も進めています。その結果、

このあたりでまた雇用が生まれようとしています。

また、「カフェ・オニヴァ」というフレンチビストロが去年の 12 月にオープンしました。神山の中でフランス料理を食べる人がいるのかと、うまくいかないだろうと思っていたんですが、たくさんのお客さんが来られています。特に、月に 1 回の「みんなでごはん」という企画が非常におもしろいんです。地元の人も、遠くから来た人も、シェフも、スタッフも、同じテーブルを囲むという集いです。この場自体が異業種交流になっているということです。新しい変化、おもしろいことはこういう場所から生まれていくということになるのだと思います。

一方、神山塾というプログラムも行っています。6 ヶ月間の職業訓練を神山にやってきて受けます。20 代後半から 30 代前半、東京周辺の出身でクリエーター系の方がたくさんやってきます。2007 年 12 月にスタートして 6 期で 77 名が巣立っていきました。そのうち約半数の 40 名くらいが移住者として神山に残っています。今、神山で起こっている変化の、2、3 割は、この若い子たちが作っている変化です。

さらに、この移住してきた子たちの中から、約 10 名くらいはサテライト・オフィスか、その関連の事業で雇用され始めています。さらにカップルが 9 組誕生して、赤ちゃんも 2 人生まれています。今、厚生労働省が注目の事業です。日本の若者の雇用と、それから少子化の問題、これが両方とも答えがあるんではないかなということです。

今、神山ではこの連鎖と循環、人が人を呼ぶという現象を起こしています。それとともに、今まで住んでいた人と新しく入ってきた人の間に知恵と経験の結合というのが起こって、新しいものがいろいろここで生まれてきてます。

最近このサテライト・オフィス、ビストロ効果というのが出てきているような気がします。どういうことかというと、このビストロがオープンしたことによって、ここで出されるパンは別の移住者が有機小麦のパンを焼いてここに出しています。ここで出されるコーヒーはデザイナーさんの奥さんで有機栽培のコーヒーを輸入してきたものをここに出しています。地域で住んでいる人も、新たにジェラート屋さんも今年の 6 月に初めて、ここでできた有機栽培のいちごのアイスクリームなどをここに納めます。さらに脱サラして、有機栽培の野菜を作っている人もいます。この人が作った野菜はこの 7 月にオープンしたピザ屋さんに納めています。

＜最後に＞

「神山モデル」とは、もともと何もならないと思われるようなソフトな部分、文化や芸術からスタートしました。その後、ワーク･イン･レジデンスでいろんな職能を持った企業者の人を集めていたら、今度は移住者だけではなしに IT ベンチャー企業とか、映像会社なんかもサテライト・オフィスを置き始めました。今まで神山になかった 1 つの塊、人の流れとか動きが出来上がってくるわけです。これが結果的に今まで神山で成立するはずもなかったサービス産業が成立し始めているというところだと思います。だから、ビストロがうまくいったり、ゲストハウスがうまくいったり、あるいはピザ屋さんがここで成立し始めた。では、このサービス産業で使われるものは何か、当然農産物が使われます。これが今農業を動かし始めてます。

ここまで見えてきたらもう少し戦略的に物事を進める必要があります。今度は有機農業者をここに集めてきて、この部分を強化していくわけです。そうするとここに盤石な有機農業の 1 つのベースができます。あと、このサービス産業、例えばオーガニックカフェとかが 5 店舗くらい、神山町内にできたとすれば、たぶん 5 年後、10 年後は神山は四国一のオーガニックフードの町になっていると思います。

普通、このオーガニックでできた野菜というのは東京へ運びます。だから、地域にはお金しか落ちない。サービスとか何とかは全部東京で生まれるということです。だからこれから地方に必要なのはこの部分を地域の中に取り込んでしまうということだと思います。オーガニックフードを食べたいのであれば、「産地へ食べに来いよ、東京の人」というぐらいの価値のものを作っていく必要があるのではないかと思います。

もう 1 つ、創造的過疎による地域開発。特にこの過疎の問題はよけいにぼんやりとする可能性が強い。なぜかというと、過疎と聞くと感情で捉え、情緒的に捉えようとします。過疎ってかわいそうだよね。辛いよね。みたいな捉え方で。だから余計これが曖昧になるわけです。これを避けるためには過疎の数値化が必要だと思います。数値化することによって、もう少しくっきりとした未来を描き出す。そしてここから現在に向かって逆算し、政策を打っていけば、これが創造的過疎が実現できる。創造的過疎の一番重要なポイントは「過疎を止めようという考え方はやめる。」と「過疎になるのは仕方がない。受け入れる。」です。受け入れた中で人口構成を健全化し、働き方とか職種を多様化することによって人の流れを生んで、それがサービス産業を、農業を組み立てていく、というような方法を考えるべきではないかなと思います。

神山は今から 7 年、8 年ぐらい前に 2005 年の国勢調査に基づいた年少人口のモデルというのを作っています。2005 年の減少がそのまま続いたら、2015 年には神山の年少人口は 433 人、2035 年には 187 人になりますよということです。ところが、この年少人口というのは、曲者なわけです。なぜかというと、人間は 0 歳児から 14 歳児までの 1 つの塊というのを頭の中にイメージすることはできません。イメージできないものが半減以下になるから大変だと言っても、市民の人たちには伝わらない、そのためもうちょっとわかりやすい数字に変える必要があります。単純に 15 で割れば、1 学年あたりの数が出てきます。今、神山では 1 学年で 28.9 人の子どもたちがいます。神山町民の皆さん、何も努力しなかったら 2035 年には 1 学年が 12.5 人になるんですよと。明確に何が起こるかということが町民、市民にわかるわけです。わかるということは物事を考えられるベースになるデータが初めて与えられたということだと思います。では、神山の皆さん、2035 年、12.5 人の数でもいいですか、減るけれども、この時に 1 学年で 20 人の神山を作りませんかと。では、15 を掛けたら年少人口が、ここから現在に向かって逆算をするとすぐ答えは出ます。今度はここから上のラインに乗せて過疎化を進める。そこでモデルの子育て世帯、4 人家族で子どもが 2 人。では、この上のラインで過疎化を進めるためにモデル子育て世帯を毎年何世帯ずつか、神山に移住してきてもらえればいいのかというのを計算で出します。そうすると、ここで 1 つの目標ができるわけですから、これに対して、もう少し政策がくっきりと見えてきます、5 世帯が住むための住居がいるでしょ、と。いずれにしても、神山では古民家に対応しているけれども、住居の問題はお金で解決できる問題です。過疎債、地方債を発行すれば、借金してでもこの住居は建てることができます。

ところが日本の田舎、地方はこの 2 番目の仕事の問題で壁に当たります。移住者を迎え入れたいけれども、うちの町には雇用がない。この問題を何で解決するかというとワーク・イン・レジデンスです。まずは仕事を持った人に移住してきてもらったらいいんではないですかと。それからいろんなものを起こしていきましょうと。

皆さん方にも好きな場所があると思いますが、好きな場所を好きなまま置いておいても何も変化しないと思います。日本という言葉で代表されています。「好きな場所、好きな日本をすてきな日本に変えましょう」難しいですか？これは案外簡単なんです。手を加えることです。手を加えるということは、行動を起こすということだと思います。

傍観するのではなしに、ちょっとでもいい方向に力を加える、行動すれば、絶対に日本はもっとすてきな場所になると思います。日本の社会の中で活躍されている皆さん方ですので、それぞれがいい方向に行動することによって、もっとすてきな日本ができればいいなということで話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

ゼミ同窓会を行いました

事務局に寄せられたゼミ同窓会のご報告の中から、一部をご紹介いたします。

立命館大学寺脇ゼミ同窓会

寺脇拓ゼミでは、2015 年 2 月 28 日（土）に、草津駅近くのアノソラノヒガシにて同窓会を開催いたしました。遠くは秋田や広島からも駆けつけて頂き、寺脇先生、在校生を含めた総勢 40 名が、和気藹藹とした雰囲気の中、食材にこだわった会席料理を楽しみながら旧交を温めました。

例年、当ゼミの同窓会は、現 3 回生の就職活動支援もその目的の一つとしており、同窓会前には在校生（11 期生）との懇談会も開かれました。就職活動を目前に控える 3 回生の真剣な眼差しには、私たち卒業生も大いに刺激を受け、同窓会の最中も、卒業生が在校生に熱くアドバイスする姿があちこちで見られました。こうした縦のつながりが今後も維持されるよう、私たちも努力していかなければという思いを強くしました。

誕生日が近い現 4 回生へのサプライズケーキも飛び出し、楽しい時間は瞬く間に過ぎて行きました。また卒業生にとっては、様々な世界で働く方々からその業界の動向を学ぶ貴重な機会にもなりました。来年もぜひ皆で集まりたいと思います。

（岩品　里佳）

第 12 回清水貞俊ゼミ OB 会

去る 12 月 23 日（日）、立命館大学朱雀キャンパス 7 階の『Tawawa 二条店』のパーティルームを貸し切り、3 年半ぶりに第 12 回清水ゼミ OB 会を開催しました。会場は落ち着いた雰囲気で、清水先生を囲んで 15 名のゼミ生が集まりました。

2010 年の本通信 10 号で、清水先生がヨーロッパ経済の歴史について執筆をはじめられたことをお伝えしましたが、このたび晴れて完成し上梓されました。構想からおよそ 10 年を費やして書かれた著書をもとに、そのエッセンスについて先生に講義していただきました。

その後は参加者一同旧交を温め、いつもの通りにぎやかで和気藹々とした会となりました。毎回初めてご参加の方があり、回を重ねてきたお陰でかなり大勢の方々が先生や世代を超えたゼミ生との交流をもたれるようになっています。いろんな事情で参加できなかった皆様も、次回は気軽にご参加いただければ幸いです。お待ちしております。

立命館大学経済学研究会 OB 会総会

立命館大学経済学研究会 OB 会総会が立命館大学朱雀キャンパスにおいて開催されました。最終的には OB が 19 名、現役学生はインゼミ及び学内ゼミと重なった為 6 名となり総勢 25 名の参加となりました。

今年はまず OB 総会が実施され、参加者の自己紹介の後、今年度の実績、来年度の活動計画、会計報告が事務局、会計からそれぞれ発表があり、僅々の課題として名簿の整備、会費収入の下落の対応策について様々な意見が交わされました。

第二部として同じ朱雀キャンパスで開催された経済学部同窓会講演会に参加しました。講師は特定非営利活動法人グリーンバレー大南理事長が講師となられ、『創造的過疎への挑戦カミヤマ・モデルが世界を変える』と題して地域活性化の取組について具体例を示されました。

地方の時代と言われて久しいですが、実際に成果を上げている例は少なく、大変興味深い講義でした。

質問の時間になり、現役学生が果敢に一番最初の質問を行ったことから、OB の私も負けじと質問をしました。（後で、濱崎先生からなかなか良い質問だったとお褒めの言葉を頂戴しました）

講演後の懇親会では OB と学生がテーブルを囲んで年代を超えた交流を深めました。

経済学研究会の名簿整理に対し学生からも積極的な提案もあり、また OB から学生への就職活動の支援への協力姿勢が示され、更なる交流の必要性を強く感じながら、散会となりました。

今後は経済学研究会のＨＰ、ＳＮＳの活用など新たな媒体でも交流を深めていきたいと思います。

（土川　俊樹）

経済学部より

【新任教員】（職位・50 音順）

2015 年 4 月より経済学部に以下の専任教員をお迎えします。

氏　名	任用職名	主な担当予定科目
杉田　伸樹	教授	日本経済論
桃田　　朗	教授	マクロエコノミック・ダイナミクス
細谷　　亨	教授	日本経済史Ⅱ

【退職教員】（職位・50 音順）

2015 年 3 月末をもって以下の教員が退職されました。

氏　名	専門分野
古川　　彰	現代日本経済論

古川先生は、2015 年 4 月より、特任教授として在職されています。

【卒業証明書・成績証明書が必要な方は…】

下記「経済学部事務室」の窓口で発行いたしております。また、郵送でのお申込も受け付けています。郵送の場合は、「証明書交付願」（様式自由。以下の事項をご記入下さい）に「証明書発行手数料」（郵便切手又は定額小為替でお願いします）、「返信用封筒」（送り先記入・切手貼付）、「ご本人を確認できる書類」を同封のうえ、下記「経済学部事務室　証明書発行係」までお申込ください。

① 氏名・ふりがな　③ 卒業年月、学部・学科　⑤ 必要な証明書の種類と枚数　⑦ 厳封の要否
② 生年月日　④ 連絡先住所・電話番号　⑥ 使用目的（簡単で結構です）

※ 証明書はできる限り日程に余裕をもってご請求いただきますようお願いします。英文表記による証明書や学力に関する証明書等は、一定日数を要する場合もございます。
※ 手数料は一通につき 300 円です。
※ 詳しくは HP でもご案内しています。　http://www.ritsumei.jp/ec/ec09_j.html

同窓会事務局より

同窓会費の納入方法について

同窓会は、皆様から納入された終身会費（¥10,000）で運営しています。入会を希望され、会費をまだ納入されていらっしゃらない方は、同窓会事務局までご連絡ください。

住所変更された方は……

会報の送付先の変更は、立命館大学校友会（TEL：0120-252-094、FAX：0120-252-095）までご連絡ください。同時に校友会誌「りつめい」の送付先変更もさせていただきます。

【『学生時代の思い出』を募集します !!】

皆様の学生時代の思い出や近況報告等を執筆いただき掲載する、『学生時代の思い出』を募集しております。これは、「原稿執筆者それぞれの学生時代の思い出を振り返ることにより、その時代時代の社会情勢や風潮、大学や経済学部を取り巻く環境、学生像などを顧みること」を目的に出版された『50 周年の思い出』の続編にあたるもので、広く経済学部同窓生の皆様より原稿を募集したいと考えております。掲載ご希望の方は以下の要領にて事務局までお送りください。

① 原稿（学生時代の思い出や近況報告等、2,000 字程度）
② 経歴（生年月日、卒業年、勤務先等、可能な範囲で結構です）
③ 写真（可能でしたら、学生時代と現在の 2 枚をお送りください。使用後、返却させていただきます）

頂戴いたしました原稿は、経済学部同窓会 HP にも掲載させていただきます。

【お知らせ】

※本誌は皆様の掲示板でもあります。各ゼミ同窓会や個人の近況・情報等、どのような内容でも結構です。事務局までお寄せいただければ、掲載させていただきます。

※同窓会に対するご質問・ご希望がございましたら事務局までご連絡ください。

立命館大学経済学部同窓会事務局

〒525-8577　滋賀県草津市野路東 1-1-1
立命館大学経済学部事務室内
TEL:077-561-3940　FAX:077-561-3947
E-mail:ecalumni@st.ritsumei.ac.jp
経済学部 HP：http://www.ritsumei.jp/ec/index_j.html
経済学研究科 HP：http://www.ritsumei.jp/gsec/index_j.html
学部 HP の「同窓会」にて最新の情報をお届けしています。